

KAGAWA GALAXY 吉田源治郎・幸の世界（148）

第148回 「吉田源治郎・吉田幸の世界」 附録



2009年は「賀川豊彦献身100年記念」の年にあたることから多彩な記念事業が取り組まれ、上に掲げた著作が過日（2010年11月1日）刊行され、新聞などで紹介されている。

この記録のなかに、記念事業のオフィシャルサイトで「賀川豊彦のお宝発見」（賀川豊彦・ハル夫妻の120通に及ぶ武内勝宛の未公開の書簡並びに武内勝氏所蔵資料などが入った「玉手箱」ふたつ）に加えて、今年の「吉田源治郎・幸の世界」の連載の中間報告を加え、「仲間 武内勝と吉田源治郎」として寄稿させて頂いた。

予定外であるがそれも「附録」として収めて置く。

（2010年12月6日記す。鳥飼慶陽）（2-14年11月16日補正）



仲間 武内勝と吉田源治郎

鳥飼慶陽

番町出合いの家牧師

鳥飼慶陽（とりかい・ようこう）牧師は鳥取県の出身。同志社大学で神学を学び牧師となり、近江八幡市の賀川豊彦ゆかりの近江兄弟社学園で教えた。イエス団に招かれ、その後、神戸市長田区のアパートの自宅を「教会」とし、働きながら神の教えを伝えるというユニークな営みを続けている。「賀川豊彦と現代」（兵庫部落問題研究所、1988年）などいくつかの著作もある。献身一〇〇年記念事業では、賀川のコーワーカー武内勝の資料を発掘してネット上で「賀川豊彦のお宝発見」を94回にもわたり執筆し、年を越えてからは、吉田源治郎の連載に取り掛かっている。プロジェクトメンバーとしての作業はたぶん2冊の著作に値し、その貢献度は計り知れない。

はじめに

2009年は、東京、神戸、徳島などを拠点として「賀川豊彦献身一〇〇年」を記念する多彩な取り組みが展開されました。22年前、1988年の「賀川豊彦生誕一〇〇周年記念事業」の折も、映画「死線を越えて」の製作上映など国内外で大きな盛り上がりを見せましたが、今回の記念事業はこれに参画された人々の広がりも、取り組みの内容的充実度も大きな飛躍を見せました。とりわけ「賀川献身の場所」が「神戸葺合新川」であったことと、懸案であった神戸の「賀川記念館の再建」という具体的で大きな課題が重なったことも大きな要因であったように思われます。

もちろん「賀川記念館の再建」には多くの困難があったはずですが、予定通り2009年の12月12日には「献館式」を、同22日には神戸ポートピアホテルにおける大規模な記念式典と祝賀の宴を、さらに2010年4月17日には「賀川記念館ミュージアム」のグランド・オープンを迎え、7月10日には「賀川豊彦生誕地の碑」の除幕式と記念のイベントなどが続いています。

ところで表題の「武内勝と吉田源治郎」です。兩人とも地味な働きに徹した方であったことにもよりますが、その全体像について主題的に論じられたり、まとめられたりしたものは決して多くありませんでした。そんな中で今回、兩人を取

り上げる報告を求められるに至った経緯は、こういうことではありません。

昨年(2009年)、10万回以上のアクセスがあったという「賀川豊彦献身一〇〇年記念事業オフィシャルサイト」において、「賀川豊彦のお宝発見」が「武内勝関係資料」を中心にして94回にわたりアップされ、引き続き今年5月から「KAGAWA GALAXY 吉田源治郎の世界を訪ねる」(途中から「吉田源治郎・幸の世界」と改称)の連載(10月1日現在87回掲載)が始まっていることが背景にあります。このサイトでは、昨年公開の「武内勝関係資料のお宝発見」も併せて閲覧可能になっています。両者の掲載は相当の分量になっていますが、ここでは限られた紙面でもあり、「武内勝と吉田源治郎」についての現在の個人的な感想のようなことを自由に綴らせていただくことにしたい。

武内勝の世界

過日(2010年7月1日)、西宮一麦教会の牧師として34年間働かれた森彬牧師から「吉田源治郎」のお話をお聴きする機会がありました。その折の森氏の言葉に次のようなものがありました。

「関東のことは分からないが、関西では武内勝は賀川の一弟子・吉田源治郎は二番弟子と見られてきたと思う」と。「弟子」と目される2人が、生前それぞれ賀川との関係をどのよ

うに自覚していたかは分からないが、昨年から現在まで2人の足跡を学び続けていて、森氏のこの言葉は私には自然に納得させられるところがあります。

武内勝は1892年(明治25)生まれ、吉田源治郎は1891年(明治24)生まれでほぼ同い年である。従って、1888年(明治21)生れの賀川とも同年代で、賀川が少々兄貴気分を持つことのできる年齢差でした。

武内は、賀川の「葎合新川」献身のすぐから、吉田も、後に妻となる間所幸(こう)は賀川ハルの横浜共立女子神学校時代のクラスメイトであった関係もあり、結婚後すぐに2人とも「賀川豊彦とその仲間たち」の1人として、その全生涯にわたって、歩みを共にしてきた間柄です。

武内は、賀川没後6年を経た1966年に74歳で、吉田は1984年に92歳でその生涯を終えており、現在も「KAGAWA GALAXY」の大切な先達として、特に関西では、多くの人々に憶えられている人物であります。

武内勝口述「賀川豊彦とポランティア(新版)」(村山盛嗣編、神戸新聞総合出版センター)が「献身一〇〇年記念出版」の1つとして刊行されたことは周知のことですが、今から36年前、1974年の旧版も、武内の静かで飾らない、情熱を秘めた口述記録は、関係者のあいだで長く愛読され続けてきました。

「創業当時の回想」という主題によるこの口述は、賀川もまだ健在であった1956年のものですが、明治の終わりか

ら大正初期の「賀川とその仲間たち」の神戸における働きが独特の語り口でユーモアを交えて語られています。

昨年、この口述の行われた数年後、周囲の人々の強い要望に応じて連続10回の口述を試みた武内の録音テープがほぼ完全な形で発見されました。話の内容は、先の口述記録とは大いに異なるもので、まさにこれも「お宝発見」の筆頭に上げても良いものであります。この発見によって、最晩年の「武内勝の肉声」にも出会えることが可能になっています。

武内勝の略歴

「武内」は「竹内」と間違えられる場合が多い。兩宮栄一氏の労作「青春の賀川豊彦」(新教出版社、2003年)でも「武内」に言及した313頁以下の箇所はすべて「竹内」です。

(ついでに同書318頁に拙著「賀川豊彦と現代」が「キリスト新聞社」刊と間違えられ、私の意図とはまるで違う取り上げられ方がされているが、再版の折はこれも含めて訂正いただければ有難い)。

そこで、武内勝の生涯に関してご存じない方のために、この度の新版「賀川豊彦とポランティア」の奥付に編者の村山牧師が書かれた「武内勝の略歴」をそのまま引いておきたいと思えます。

武内勝

1892年(明治25)9月、岡山県邑久郡(現瀬戸内市)長船町

に生まれる。

1910年(明治43)から、賀川豊彦の同労者として、多様な宗教・社会活動を助け、神戸における賀川の社会活動の最大の支援・後継者であった。

武内は、口入屋から生まれた職業紹介所が国営に移管となるや葺合労働紹介所長となり、1951年(昭和26)4月に神戸公共職業安定所長を退職するまで、31年間にわたり「日雇い労働者の父」として職業安定行政に従事した。

彼は、その他に東部労働紹介所長兼西部労働紹介所長、葺合労働紹介所長、神戸公共職業紹介所長、協同牛乳社長、神戸生活協同組合長を歴任し、また、兵庫県職業安定審議会委員、同労働保険組合理事、社会福祉法人・学校法人イエス団常務理事、財団法人愛隣館理事、友愛幼児園長、神視保育園長にも任じられている。

1966年(昭和41)3月31日、賀川の死から6年後に、武内はイエス団理事会の最中に倒れ、師を追うように他界する。

また、昨年、賀川の名著『友愛の政治経済学』(コープ出版)が翻訳出版され、いま話題を呼んでいます。訳書の中の第7章「共済協同組合」の項で、賀川が神戸における武内勝の開拓的な取り組みに言及していることは記憶に新しいかも知れません。しかしこれも既に「オフィシャルサイト・賀川豊彦のお宝発見」の第24回でも紹介しているので、ここでは取り上げません。

「賀川豊彦のお宝発見」

昨年、「献身一〇〇周年記念」の年の春、長年待ちわびていた出来事が起きました。武内勝・雪のご子息、武内祐一氏が、今日まで大切に保管しておられた「武内勝関係資料」の閲読を託されることになったのです。祐一氏とは、若き日に神戸イエス団教会に招聘された頃から今日まで、途切れずに友情を温めることができた同輩ですが、遂に「武内資料の閲読」の時が来たのです。その詳しい経緯もサイト上で記したので、この度の「資料」について簡単に記せば、次のような次第となります。

関係資料は2つの箱に収められていました。便宜上「第1玉手箱」と「第2玉手箱」と名付け、その整理に当たりました。「第1玉手箱」は、雪夫人の筆で「賀川先生の手紙」と書かれた木箱でした。そこには何と、賀川豊彦とハルが武内に宛てて送った書簡や葉書が120通ほどまとめて収められていたのです。ナマの書簡がナント120通である！前記の「賀川豊彦とボランティア」で紹介されている賀川から届いたという書簡類は、なぜか玉手箱には見当たりませんでした。これだけでも大変なことであります。

そして「第2の玉手箱」には、馬島個や遊佐敏彦など知友から届いた書簡や葉書類、武内の手帳33冊と大型ノート(昭和2年から4年までの「日記」記載ほか)、「賀川先生新川伝

道回顧談」など武内草稿5本、アルバム4冊などが納められていました。武内愛用の「めがね」もありました。

最初の作業は、諸資料を分類・整理し、書簡類も年代順に並べ替えてファイルに収め、武内祐一氏の了解を得て、判読可能なものはパソコンに打ち込みました。全くの素人で慣れない作業でしたが、伴武澄氏のサポートのお陰で「献身一〇〇周年記念事業オフィシャルサイト」の「お宝発見」のコーナーとしてアップが開始されました。それが積み重なり、昨年の献身記念の日、2009年12月24日まで94回の連載となったのです。

この作業には余禄満載であったのと、「武内資料の閲読」はまだまだ継続中ですが、関連して更に新たな出来事が起こったので、この項はここまでとし、次に進みたい。

吉田源治郎の世界

さて、現在ネット上で連載中のものは「吉田源治郎」のことです。実はこの人に関しても、ほとんど知らない人でありました。たまたま上記の武内勝の「お宝発見」の余禄として、私の住む神戸市長田区番町における賀川や武内、馬島側や芝やえたちの活動拠点だった「天隣館」で戦後すぐの頃、長田保育所を開設し日曜学校などでも活躍した人々―大垣坦弥・とよの夫妻、河野洋子ほか―の聞き取りなどを進める中から、「吉田源治郎のご子息・吉田祺氏が関西学院の学生だったところ、

賀川梅子ら関学神学部の学生たちと共に「天隣館」に頻々（ひんびん）と足を運んでいて、祺氏は関学グリーで鳴らしたお方である」という情報を小耳に挟み、是非一度会って、その頃のお話を聴きたいという私の希望から事が始まったものであります。それも今年（2010年）4月になってからのことでもあります。

吉田祺・梅村貞造両氏との出会い

渡りに船ということであろうか、有難いことに若き日から吉田源治郎・幸夫妻とは西宮一麦教会及び一麦保育園などで身近に接し、吉田祺氏とも親しく過ごしてこられた梅村貞造氏（現在一麦保育園顧問で西宮一麦教会役員）の積極的な協力もあり、現在甲子園二葉教会（吉田祺氏の所属教会）の元正章牧師も加わり、4月5日午後、第1回の「西宮の一麦保育園における吉田祺氏の聞き取り」が始まったのであります。するとどうであろうか、吉田・梅村両氏とも御歳のことを申し上げるのも失礼であるが、お2人とも現在80歳。長年にわたって「賀川豊彦とその仲間たち」の大切なお1人としてご活躍の傍ら、それぞれご自身の歩みと重ねて関係資料の収集調査を積み重ねて来られた方々だったのです。梅村氏は主として「西宮一麦教会」並びに「一麦保育園」関連の諸資料を、吉田氏はご両親の生涯から逝去まで幅広く資料を集め、梅村氏はご自身の所属される教会史や保育園史に、吉田氏は

「甲子園」「葉幼稚園史」などに執筆して来られた方々だったのです。

元正章牧師と私は専ら聞き役で、次々と取り出されてくる関係資料や写真類などに驚きながら、「吉田源治郎・幸夫妻の世界」に目を白黒させる事態となりました。思いもかけなかったことでありましたが、その後何度か一麦保育園での四人の出合いを重ねるうちに、梅村氏所蔵の主として「一麦関係資料」と吉田氏所蔵の大量の「吉田源治郎・幸関係資料」が、狭い我が家を持ち運ばれる事態となったのです。昨年の「武内勝資料」の「お宝」と同じ事態です。新たな「お宝」を喜んでお預かりはしたものの、さてこれをどうしたらよいか判断のつかないまま、とにかく一通り資料の整理を進めていきました。

源治郎の「説教」と「肉眼に見える星の研究」

実は後先になりますが、4月5日の第1回の集まりの前に、以前寄贈していた西宮一麦教会の『五十年の歩み』（1998年）を取り出し、吉田源治郎牧師の「前進する教会」と題する説教を読んだのです。この説教は1967年3月、西宮一麦教会の創立20周年記念礼拝での説教を録音し、それを31年後の記念誌に文章化されたものでありました。その吉田源治郎牧師の古い説教に、何故か私の心を捉えるものがあり、何も知らなかった「吉田源治郎牧師」のことを、この機

会に学んでみたいと考えるようになっていたのです。

もう一つ私を惹きつけたのは、源治郎が「肉眼に見える星の研究」（聖醒社書店、1922）という作品を残していたことです。宮澤賢治がそれを読んで作品に活かしたことを耳にし、既に古書店でその初版本を手に入れて読んだことも大きかったです。

吉田源治郎の略歴

ともあれ私の知らなかった「吉田源治郎」の略歴のようなものを、ここに短く取り出しておきたいと思います。

吉田源治郎

1891年（明治24）10月2日三重県伊勢宇治山田に生れる。
1907年（明治40）宇治山田教会にてヘレフォード宣教師より受洗。

三重県立第四中学から明治学院へ進学。在学中に内村鑑三の主宰する「柏木教友会」に所属。日曜世界社の西阪保治との交流もあり最初の著書「児童説教」を仕上げる。（妻となる間所幸は、共立女子神学校で賀川ハルと同期）

1918年（大正7）京都伏見東教会牧師となり、翌1919年には間所幸と結婚、賀川豊彦を訪問。以後、賀川の講演記録の作品を仕上げる（「イエスの宗教とその真理」「聖書社会学の研究」「イエスの自然の黙示」「イエスの人類愛の内容」

など多数)。

1921年(大正10)「イエスの友会」の命名者。

1922年(大正11)「肉眼に見える星の研究」を出版し、

直ぐ米国オーボルン神学校へ留学。

1924年(大正13)に卒業。ユニオン神学校などでも学び、その後賀川と共に欧州視察旅行。同年帰国後「四貫島セツルメント」初代館長。

1925年(大正14)シユヴァイツァー「宗教科科学より見たる基督教」翻訳出版。

1927年(昭和2)には「農民福音学校」開校に参画。

戦前戦後、その生涯の殆どを「大阪四貫島教会」「西宮一麦教会」「甲子園二葉教会」その他、多くの教会の創設と牧会を続け、その地道な献身的な働きは、今も語り継がれている。

1968年(昭和43) 社会福祉法人イエス団常務理事。

1984年(昭和59) 1月8日 92歳で逝去。

著書(翻訳書や賀川の講演記録本などを除く)「児童説教」「肉眼に見える星の研究」「肉眼天文学」「新約外典物語」「心の成長と宗教教育の研究」「勇ましき士師たち」「五つのパンと五千人」「神の河に水みちたり」ほか(生涯を共にした妻・幸に関してはサイトでは取り上げているが、ここでは主題ではないので省略する)。

おわりに

以上は限られた紙面での「中間報告」です。「武内関係資料」は、神戸文学館での企画展「賀川豊彦と文学」で専門的な学芸員の手で公開展示され、新たに完成した「賀川ミュージアム」でも現在その一部が公開されています。「吉田源治郎」に関して、サイトでも紹介しているように先行研究として、岡本栄一氏(ボランタリズム研究所所長)や尾西康充氏(三重大学教授)の労作があり、それらの道案内で、楽しみ学びながら、たどたどしく連載を続けているところであり、既に与えられた紙面を超えているので、此処までにしておく。

